

bibligare

まちなか図書館情報紙 [ビブリガーレ]

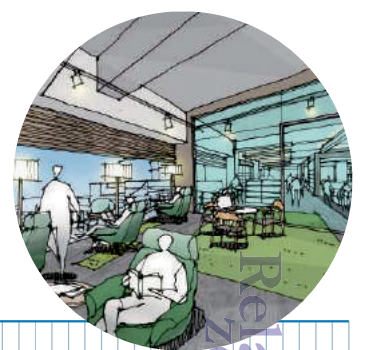
世界を広げ、まちづくりに繋げる
「知と交流の創造拠点」

まちなか図書館情報紙「bibligare」とは
bibliは「本」、ligareは「つなげる」を意味し、
本を通して人、街に繋がる図書館をイメージした造語です。 ●発行＝豊橋市役所 都市計画部 まちなか図書館整備推進室



Welcome zone
まち・ひと・本をつなぐ空間

新しい図書館、はじまります。



Relaxation zone
自然を感じる
くつろぎの空間



Grow up zone
未来への
夢が広がる空間



Active zone
新たな出会い、深まる興味



Learning zone
内なる情熱が
わき立つ
集中・創造の場



特集1 「本」や「人」との
出会いが生まれる場を目指して
特集2 本とわたし



愛知大学文学部現代文化コース
メディア芸術専攻2年
メデア・アート専攻2年
小学の時、
何にもなれるというところから
後進に興味をもち、
現在、メディア芸術専攻を本専ら、
サークル活動として演劇に関わっている。

岩奥沙紀
わたしの
「きみの友だち」
著者 重松清

愛知県立豊橋東高校
成瀬なぎ沙
「図書部」で催された
ビブリオバトルに参加し、
右隣のことに参加し、
言うことこの備前
「チャン本」を選んで
頂きました。
機会があったら
また参加してみたいと思います。



わたしの
「鳥は主を選ばない」
著者 阿部智恵

私の「本との出会い」とは、大抵がそんな大層なものではなく、「本屋でふと目に止まったから」という程度のもので、この本もそうやって出会ったが、私はこの出会いがあつて本当に良かったと感じている。何しろそれがあつたからこそ、私はこの素晴らしい世界に浸れるのだからこのシリーズは、八咫鳥という妖怪が人のように暮らすことも不思議な世界観に、魅力あふれるキャラクター達、そしてそれが物語の中で徐々に解かれていくのも醍醐味だが、構成がとても細かく、壮大でありながらも緻密に作り込まれていることにも驚いた。ぜひエンターテインメントとして、多くの人に読んでほしい、感想を語り合いたい本である。

友達関係の面倒さに気付いてしまった中学時代。なるべく関わらないように、休み時間は図書室に逃げた。そこで出会ったこの冊。率直な題名周りから少し浮いている水色の表紙、どちらかといえば「匹狼」当時の自分似ていたら、気付いたら手に取っていた。優しい口調で語られる、恵美ちゃんを中心とした10編の「きみ」の物語。その中、自分を辛さ、自分の気持ちを誤魔化してしまつた後の悲しみに共感して泣いた。そして、少し強くなった気がした。あれから七年、今でもよく読み返す。別に感動したいわけではない。むしろ今は素直な気持ちで感じる。でも、そつと支えたいのは変わらない。私の大切な「友だち」なのである。

わたしの
「図書館戦争」
著者 有川浩

「図書館で、本を守るために戦う」という設定が好きな。運動神経抜群で、誰よりも本を守りたいと思つて、その主人公笠原郁と、直属の教官である堂上篤を乗り越え、目標に向かってひたすら突き進む姿が好き。主人公の同僚、先輩、どのキャラクターの話も楽しい。特に、笠原の友人、柴崎麻子と二人の同僚の手塚光。彼ら二人の関係性が良い。映画と漫画でメディアミックスもされており、映画ではアクションが、漫画ではラブコメディがあつて、どちらも面白く、まだ読んでいない人にオススメしたい。興味は読書と書き、高校卒業後は就職します。今は専攻で忙しいです。



河合萌杏
わたしの
「日本文化私観」
著者 阪口安吾

本のわたし
まちの人とお気に入りの本を紹介。



佐藤二行
世界の毛糸アトリエマルス店主
今はお店で仕事をしながら生き甲斐があり、1日中仕事、手づくりをしています。

わたしの
「花の風」
著者 清々行

「清水行」という自分と同じ名前の著者が、どのような本を書いているのか興味を持ったのがこの本と出会ったきっかけである。昭和40年代から彼の企業小説をずっと読み続けていたが、この本にある企業家のトップと政治家等の関わりが、現代においても脈々と続いていると感じられる。そして、この作者の本が好きで、今も何冊も読み返しているが、やはり「この本が私にとって何か」にする、「へへ…」とする冊です。



わたしの
「料理歳時記」
著者 阪口安吾

文化とは、伝統とは日本人とは。若干マツチな論調で語られる「日本文化私観」切取り口で語られている。初見は内弟子時代、制作に行き詰つた時初心に戻る為に、折に触れ読み返している薄のような二冊。「料理歳時記」安吾と同世代の主婦料理研究家が旬の素材を使った家庭料理のエッセイ集。優り丁寧な日本語で綴られた料理の数々。どれも興味深い。宝石を愛するように毎日少しずつ読み進めていきたい。安吾と浜子、相反する二人のようだが共通するのは「ピット」のおいがる事。そのおいが「文化」の本質を内包している様な気がならない。だから私は両者の作品がたまらなくおもしろく感じるのだ。

わたしの
「本当のようなウソを見抜く」
著者 藤本美穂

鈴木敏文の「本当のようなウソを見抜く」セブンイレブン式脱常識の仕事術。セブン&アイホールディングス鈴木敏文会長の経営学。コンビニで常にトップを走り続けている事が物語ついているように、世の中に存在する本当のようなウソを見抜く、どうやって真実を掴むかが記されている本。名言となった「顧客の立場で考える」事を実践し、不可能と言われたことをどう実現し、成果を上げるかを知ることができ、その脱常識である仕事術は、バード大のビジネススクールの教材にもなっている。普段利用している教材にも二の身近な事例であり、その仕事に対する考え方、方法などは年代や業種、職種に限らず読める本である。当時エンジニアからマーケティング部署に異動となった際に出会い、現在も仕事に対する考え方を学ばせてくれた本である。



株式会社エニックス代表取締役社長
浜武恭生

2013年2月7日、ロハスネットホール事業にて開催した活動。浜松東区河津町の運営会社、株式会社エニックスの代表取締役社長に就任。趣味はゴルフ、好きな事は観劇で楽しむ酒席。

岡本和弘
日本彫刻家協会
GAM展理事
伝統工芸井波彫刻の伝承者として、彫刻家人生を始める。アートイベント「Ato Ato」の作品を発表している。

お問合せ
豊橋市役所都市計画部
まちなか図書館整備推進室
〒410-0862 豊橋市松葉町20
TEL:053-461-0202
FAX:053-461-0203
※制作＝株式会社エニックス
※発行＝株式会社エニックス



「本」や「人」との出会いが

平成31年度中に開館予定。

まちなか図書館(仮称)は、それぞれ特徴を持った5つのゾーンの中から、その日の目的・気分に合わせて、好きな場所を選んで、思い思いの時間を過ごすことができる市民のサードプレイスを目指します。

生まれる場を目指して

アクティブゾーン 交流

食・健康・音楽・映像など「日常生活を豊かにする本がテーマ」イベント開催時にはその内容に合った本を並べたり、立ち寄った人も興味をわく空間に。
共通の趣味や目的のために交流イベントや活動を行う「大人の部活動」や、地元店舗がフロアならではの「コト」を教える「出張まちゼミ」等、新たな出会いや交流が深まる場。



気軽に手に取れる雑誌や、新着本、お勧めの本を中心にそろえます。書棚の配置を柔軟に変えるなど、ディスプレイも工夫。立ち寄りやすくワクワクする空間に。「コンシェルジュ」によるまちなかの最新情報の案内や、他のイベントを鑑賞できる「ハブリックビューイング」を行う等、外のきびやかな空間と図書館の中を緩やかに繋ぐ場。

ウェルカムゾーン ワクワク 心躍る



創造 ラーニング・クリエイティブゾーン

ビジネス経済関連の本や、科学技術デジタルなどの専門書と最新の情報機器の活用により、ビジネスパーソンなどがスキルアップを図る創造活動や起業に繋がる空間に。また、財産・法律・健康といった暮らしに役立つテーマの本を置き、日頃感じる疑問や将来の不安の解消にも、地元クリエイターによる情報メディアの表現発信方法などを学べる「クリエイティブ系ワークショップ」、ベンチャー企業等による「起業支援セミナー」等、内なる情熱がわき立つ、集中創造の場。



成長 グローアップゾーン

若者が集まる場。学校生活に役立つ本やティーン向けの雑誌、音楽、ファッションなど若者の興味を引く本が中心。他にも将来への夢が広がる本、社会情勢に関する本などにより、読書が若者の成長に繋げられる空間に。同世代に薦める本を並べた書棚づくりや、学生が制作・運営するウェブサイトをLINEなどにより図書館のPRを行う「放課後クラブ活動」や、「部活動コンテスト」等、同世代の友人と語り、将来について考える場。



ソムリエサービス

Q ソムリエってなに？

まちなか図書館(仮称)の特色としてソムリエサービスがあります。ソムリエは、特定の分野について専門的な知識を持ち、図書館で行われるイベント、セミナーの講師等のほかスタッフに対し選書の支援や市民からの相談、疑問への対応についてアドバイスします。

Q 誰がソムリエになるの？

主体となるのは、市の職員や関連する団体だけでなく、地域の特色ある企業、大学、まちづくりに繋がる活動を行っている団体や個人などがあります。



bibligare コラム

愛知工業大学工学部建築学科 准教授
まちなか図書館(仮称)
実務顧問 定期職員
アドバイザー
来館者を促す一環としての
図書館を研究
中井孝幸

近年、テレビや雑誌で 全国の様々な図書館が 取り上げられ話題に

きっかけは、地方のある図書館が館内カフェを入れたり書籍の販売を行ったりと、今までにない先進的な取組を始めたこと。多くの人が来るようになり、瞬く間に全国区の図書館となり、また、誰もが使える場所として再考するきっかけとなり、図書館で何か生まれるのではないかと、可能性を示してくれました。

これからの図書館の可能性

図書館の取組
大学で図書館の調査をよくします。それにより人口の3割しか使っていないことが分かりました。残り7割の人たちに関心を持ってもらい、まずは来てもらう。そう考えると、待つよりもだめなかな、積極的に図書館が外に出ていくことが必要かなと思います。また、今はスマートフォンやインターネットが普及してきたため、個人で社会と繋がることもできます。だからひとりでなくても参加しやすい場や、個人が集まってグループをつくる、という空間が求められています。図書館は守備範囲を広くすることで、いろいろな使われ方ができるようになります。本好きの人だけが利用するだけではなく、こうしたことも取り入れてほしいなと思います。

図書館の課題

図書館の一番の課題は、音ですね。これがもう少し解消されたいなことをできるんじゃないかなと思います。音を出してもよいオープンな空間と、静かにしなければいけないクロードな空間、両方を用意することが大切ではないかな。音というのは、ある人にとっては心地良いと感じても、そうでない人にとっては騒音です。両方の空間を用意するなど工夫すれば、両立は可能であると思います。

図書館サービスへの期待

人は享受しているサービスにしか要求は上がりません。需要の掘り起こしを考えると、どのような形で、いろいろなサービスを受けられるようにするまで、その中から掘り起こすことが必要かと思うんです。これからの図書館はもっと挑戦していくべきだと感じています。

本に親しむということ、 読書のちから

最近の事例

鳥根町の海士町には図書館がなかったため、そのあがる学校に司書を置くことになりました。その結果子どもたちが年間100冊くらい本を読むようになりました。子どもは慣れ親しんでいくと、図書館を使い続けてくると勉強する、大学生になると何かを調べて書くために利用してきた人たちが結婚して子どもが生まれたら、息子や娘を連れて図書館を使うと受け継がれていきます。このように考えると、本がある環境をずっと保ち続けていくことが重要で、最初は学校の図書室かもしれないし、自宅の書斎かもしれない。これは図書館のことだけでなく大切なことではないかなと思っています。

電子書籍

最近、電子書籍の普及により本がなくなるのではないかな、図書館がなくなるのではないかなと言われます。これは想像力が鍛えられている証です。だから私は、読書はクリエイティブなことだと感じています。

読書はクリエイティブ

本を読んでいる時、書いてあることを理解するために頭を使い、そのシーンや状況をイメージします。これは想像力が鍛えられている証です。だから私は、読書はクリエイティブなことだと感じています。

図書館の魅力

東日本大震災をきっかけに、人々は、地域の歴史や文化についての資料の大切さに気づき始めました。図書館というのは、30年と時間をかけて皆さんに使っていただく、息の長い施設です。皆さんに使ってもらうことで変わっていく、それが地域の歴史になり、記憶になり、蓄積されていくのが面白いかなと思います。そこに、誰もがアクセスできるというのが図書館の魅力であり、これからの役割だと思います。

